



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン  
20周年記念演奏会

'97.4.13(日)PM4:00開演  
都南文化会館キャラホール

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン代表

下 田 潤

本日は、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン20周年記念演奏会にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

私たちの合唱団は、1977年2月27日「カンタータを歌う会」として発足して、同年6月28日に現在の名称に改称し、「J・Sバッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として活動してまいりました。

第1回の演奏会として小林道夫先生指揮のもと東京芸大バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演でバッハのカンタータ第45番と第147番を演奏致しましたのが、つい先日の事のように思われます。

当時既に芸大バッハ・カンタータ・アンサンブルの常任指揮者であり、ソリストとしても盛んに活動しておられた若き日の佐々木正利先生が毎月1回盛岡に来てくださってJ・Sバッハの音楽を基礎から指導をしてくださいました。

その頃は、佐々木先生に紹介されたバッハに関する本を皆で読んで、新鮮な感動を共に味わい、将来大勢の若い団員と一緒にバッハの大曲を歌う夢をみながら、少数の団員が熱心にカンタータのレパートリーを積み重ねたのでした。

やがてドイツ留学と、欧州各地での活躍を土産にした佐々木先生のご帰国、岩手大学へのご着任に伴い、待望の若い団員が入団し、エネルギーに満ち、充実した練習ができるようになりました。

「盛岡をバッハ研究のメッカにしたい」という佐々木先生の情熱と、その優れた音楽性に基づく指導で団員は日々成長いたしました。団員の成長につれて、一流の指揮者、ソリスト、アンサンブルとの共演に恵まれ、数々の貴重なステージを経験することができました。

このような活動は、各方面の方々から絶大なご理解とご協力をいただき、そのうえに聴衆の皆様のご支援があつてはじめて実現したことであり、20周年を迎えるに当たり、感謝の念を新にするものがあります。

さらに私共はこのような演奏会によって、過去3回のドイツ演奏旅行を通して学んだ多くの事柄を、愛する盛岡の地の文化興隆のために役立てることができましたら、なによりの幸せでございます。

本日は、J・Sバッハが第15代カントール（音楽監督）をつとめ、マタイ受難曲ほか多数の曲を作った、ドイツのライプツィヒ聖トーマス教会で第30代カントールをつとめられたハンス・ヨアヒム・ロッチュ先生をお招きして、第1部と第3部の指揮をお願いしました。第2部は常任指揮者の佐々木正利先生が指揮台に立たれます。本格的なバッハの演奏をお楽しみいただけるものと存じます。

本日もまた、偉大なバッハの音楽を皆様と共に味わうことができますことを感謝致します。

創立20周年記念演奏会に寄せて

## “「おわった……」は禁句だぜ”

佐々木 正 利

1980年5月5日。日本では子供の日。私は遠く離れた東ドイツ、ライプツィヒ市にいた。思えば、この年の3月をもって、7年間勤めた高校教諭の職を辞し、長年の夢だった『国際バッハ・コンクール』を受けるべく、西ドイツに渡ってから、この日でひと月が経過していた。このひと月の間、ほとんどしゃべれないドイツ語と悪戦苦闘しながら、南ドイツで3回リサイタルを経験し、ドイツの空気になじもうと、懸命に努力をしてはみた。だが、いくらビールが好きだとて、水を飲めない拷問は、予想以上に私を苦しめ、飾り気のない温かみで包んでくれたドイツ人の愛情も、ひとりぼっちの私から、気力や体力の消耗を阻止するに、あまり役に立ったとは言いがたい。それでも、このひと月、バッハ・コンクールの審査員を務められるローレ・フィッシャー先生の薫陶を受けたことは、ライプツィヒへの夢を繋いでくれるものであったはずなのに……。『おわった……』か？。

場所は、シティホテルの受付カウンター。西ドイツからの国境を越えたとたん、時代が20年溯って窓の景色はセピア色。まさかとは思ったが、シティホテルとは名ばかりの、老朽化が著しい、盛岡市立病院の病室に、錯覚してしまった。そこで待ち受けていた新たな試練は、フィッシャー先生が急病で審査員をキャンセルなさったという知らせ。そうでなくとも東西冷戦下、西の人間が入賞するのは奇跡に近いとまで言われたこのコンクールだけに、思わず『おわった……』とこうべを垂れた。

それから2週間後の19日。すべてのスケジュールを無事終えて、へとへとに疲れ切っていた私だが、なぜか審査委員長の笑いだけが一滴の清涼水となって、深く心に染み渡っていた。マラソンの有森選手が、レース終了後『自分で自分を誉めてあげたい』と言ったそう。成績が悪くとも、注目度が低くとも、同じ言葉が口をついて出てくるなら、それはよし。その時の私には、考える気力も、しゃべる勇氣も、視界も思考も定まらず、ただただ『おわった……』と茫然としていた。

時は変わって1990年11月5日。静岡での演奏会を終え、東京に向かう新幹線の車中に呼び出しのアナウンスがかすれた。『東京二期会の佐々木様、お電話です……』。時刻はまだ昼の12時を回ったばかりというのに、すでにキリンのロングカンが4本空になっていた。かすれたのはアナウンスの声ばかりでなく、電話の相手からの声を聞いた私の頭もだ。ゲヴァントハウスとトーマス教会のマタイ公演が、エヴァンゲリストが病に倒れ、休演のピンチに追い込まれているというのだ。ダブル・キャストの片割れ、いやそんなことを言っては失礼な、天下のペーター・シュライヤーがいるというのに、なぜか指揮者が『日本には佐々木がいる』とうそぶいているらしい。それから1時間後、東京駅にはジャパン・アーツのマネージャーが佐々木を拉致するために張り込み、その30分後大阪行きの下り新幹

線の、とある禁煙車の3列側の3席で佐々木は高いびき。夜も更け始めた21時50分、名古屋市民会館のステージの上で、回りをみな東ドイツの人々に囲まれて、指揮者とともにおじぎを繰り返す佐々木がいた。でも心の中では「おわった……」と溜め息をついていた。

フェラインもよく成長したものだ。もう20年にもなるのか。佐々木と同様、うまくもかゆくもないのに、ただひたすら好きなだけで歌い続けてきた。本当にあたまが下がる。この情熱の原動力はいたい何なのか。1991年にヴィンシャーマンと再会した時、この疑問が解けたような気がした。要するにヴィンシャーマンもフェラインも、純粹に音楽賛歌、人間賛歌を歌い上げているのだ、ということが。1993年の歴史的なマタイ受難曲公演。なぜ歴史的かという、決して歴史的な名演ではないかもしれないが、ヴィンシャーマンにとっての初めてのマタイのタクトだった（と思う）から。この時のエヴァンゲリストを担ったマルティン・ペッツォルトは、1980年のコンクール当時、当地のメンデルスゾーン音楽大学の声楽科の学生で、日本から受けに来たテノール歌手に憧れたそうな。こちらは知らないのに、初対面で抱き付かれたのに、一瞬目が点になった。1995年のヨハネ公演でのエヴァンゲリストも、このコンクールで6位に入賞したニルス・ギーゼケ。こちらは、私の方が覚えていて、彼は忘れていた。でも、二人ともうまい。年にかかわらず、声に艶がある。「おわった……」なんて言っていられない、と正直思った。

1980年のバッハ・コンクールの審査委員長を務めたのも、1990年のマタイ公演の指揮者も、本日私たちのためにタクトをとって下さるハンス・ヨアヒム・ロツチュ先生である。バッハも務めた、ライプツィヒ聖トマス教会の音楽監督を昨年退かれたロツチュ先生であるが、かえって自由の身になったがために世界中を駆け巡られている。この度の日本滞在でも、この後東京で口短調ミサとヨハネ受難曲の公演が待ち構えておられる。先生の音楽人生もこれから、これから。「おわった……」なんて言ったなら、ぶっとばされそう。

20年。成人。これからフェラインも、少年Aとごまかせない。本日の成人式は、バッハゆかりの地から、これ以上願ってもない介添え人を得て、正統的に、襟を正すに、ふさわしいものとなりそう。この後、子、孫の世代になっても「おわった……」と人々から言われないよう、もう一度原点に帰って、音楽できる喜びを噛み締めたいと思う。

## 第Ⅰ部 「昇天祭オラトリオ」

Himmelfahrts-Oratorium. BWV11

指揮：H. J. ロッチュ

— 休 憩 —

## 第Ⅱ部

Kyrie-Christe, du Lamm Gottes F-Dur

BWV233a

Kyrie c-Moll (Fremde Komposition)

aus der Missa BWV Anh.26 mit Christe g-Moll

BWV242

Virga Jesse floruit

BWV243a

Gloria in excelsis Deo

BWV243a

Sanctus D-Dur

BWV238

指揮：佐々木 正 利

— 休 憩 —

## 第Ⅲ部 「マグニフィカト」

Magnificat

BWV243

指揮：H. J. ロッチュ

指揮：H. J. ロッチュ、佐々木 正 利

独 唱：ソプラノⅠ／徳 永 ふさ子      ソプラノⅡ／小 原 伸 枝  
ア ル ト／佐々木 まり子      テ ノ ー ル／佐々木 正 利  
バ ス／小 原 浄 二

オ ー ケ ス ト ラ：東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

バイオリンⅠ／川 原 千 真      大 田 也寸子

大 谷 美佐子      上ノ山 隆

バイオリンⅡ／花 崎 淳 生      海 保 あけみ

山 内 久美子

ビ オ ラ／李 善 銘      続 橋 直 子

チ ェ ロ／田 崎 瑞 博      伊 藤 さやか

コントラバス／蓮 池 仁

フ ル ー ト／阿 部 博 光      立 川 和 男

オ ー ボ エ／小 畑 善 昭      長 岡 大 輔

ファゴット／寺 下 徹

トランペット／海 保 泉      坂 井 俊 博

竹 内 信

ティンパニ／安 藤 芳 広

オ ル ガ ン：剣 持 清 之

合 唱：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

## プロフィール



ハンス＝ヨアヒム・ロッチュ Prof. Hans-Joachim Rotzsch,  
(Thomaskantor)

1929年ライプツィヒで生まれる。基礎的な音楽教育を戦時中フランクフルト・アム・マインで受ける。ギムナジウム時代にはすでに、ボーイ・ソプラノのソリストであった。45年にライプツィヒに戻り、49年にはライプツィヒ音楽大学でギンター・ラミン、アマデウス・ウェーバー・ジンケ、ヨハネス・ヴァイラウフに師事して教会音楽を学ぶ。53年教会音楽での国家試験合格後、さらにフリッツ・ボルスターのもとで声楽を師事、そして聖トーマス教会合唱団のバーゼルでの客演公演で、バッハの「ヨハネ受難曲」のソリストとしてデビューを飾った。この間、国内・海外でソリストとしての地位も確立する一方、聖トーマス教会合唱団のヴォイス・トレーナー、ライプツィヒ歌劇場への定期的客演、ライプツィヒ音楽大学の講師と多岐にわたる活躍をみせる。

伝統あるライプツィヒ大学合唱団の演奏会を成功に導いたことにより、彼の合唱指揮者としての名前は一段と高まった。優れた大学合唱団の指導に当たり、国内はもとより、チェコ・スロヴァキア、旧ソ連、ハンガリー、ポーランドでも公演を行い、絶賛を浴びた。72年ライプツィヒ市評議会からライプツィヒ聖トーマス教会合唱団のカントールを命じられる。67年旧ドイツ民主共和国芸術賞、76年同国家賞をそれぞれ受賞している。



佐々木正利 テノール・合唱指揮

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元（声楽）、小林道夫（演奏法）、服部幸三（音楽学）、森明彦（発声法）、松本民之助（作曲）、岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。1973年にバッハ・クリスマスオラトリオの福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡り、L. フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H. クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP. シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、ブタベスト・フィルハーモニー管弦楽団等、世界各国の著名オーケストラ、N響、読響等、日本の殆どのオーケストラのソリストとして起用され、K. マズア、H. シュタイン、H. プロムシュテット、岩城宏之、小沢征爾等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的バッハ指揮者であるH. ヴィンシャーマン、H. リリング、H. J. ロツチュ、M. コルボ、R. ヤコブス等率いる、ドイツ・バッハ・ゾリステン、シュトゥットガルト・バッハ合唱団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、R I A S室内合唱団等の演奏会に度々出演し信頼を勝ち得ている。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、R. パーダー指揮のモーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊とバッハ・マニフィカト等を共演、絶賛を博した。在独中はヴェストファーレン州立歌劇場等で「グリゼルダ」のコラード、「フィデリオ」のヤッキーノ、「コシ・ファン・トゥッテ」のフェランド役で出演。現在までリサイタル18回を数え、レコード・CDも十数本、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てるとともに指揮者としての活動を開始。以後、20年余にわたって主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団を率いての3度にわたるドイツ公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイでは『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ. ツィルヒとの天地創造では『音楽と言葉の見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。1987、88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen. マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指揮講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。1994年、長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られた。

現在、岩手大学教育学部音楽科教授。二期会会員。グルッペ・ベッヒライン会員。日本声楽発声学会理事。日本発声指導者協会常任理事。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。水戸バッハ・コレギウム音楽顧問。



## 徳永ふさ子 ソプラノⅠ

札幌に生まれる。東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程修了。長内勲、嶺貞子、小林道夫の各氏に師事。デトモルト音楽大学に留学。その後3年間、ドイツを代表するコンサート歌手、アグネス・ギーベル（ケルン）の下で薫陶を受ける。帰国後はオラトリオ・カンタータのソリストとして、各地で演奏活動を行っている。北海道教育大学函館校非常勤講師、女声合唱団「華の会」指揮者、「ムシカ・ポエティカ」スタッフ。「グルッペ・ベッヒライン」会員。



## 小原伸枝 ソプラノⅡ

1965年岩手県釜石市生。1987年岩手大学教育学部音楽科卒業。1991年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。この年のNHK洋楽オーディション合格。1994年東京芸術大学大学院修士課程独唱科修了。声楽を、阿部佳代、佐々木正利、伊藤亘行、伊原直子の各氏に師事。芸大在学中より、小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに在籍し、多くの演奏会でソリストを務める。1992～1994年にバッハコレギウムジャパンに所属し、世界的な演奏家たちとソリストとして数多く共演、好評を博す。1994年5月より1年間ドイツ（デトモルト・ハンプルク）に留学。ヘルムート・クレッチマル、トゥーラ・ニーンシュテットの各氏に師事。現地においても数多くの演奏会に出演し、特にハンプルクにおける「受難節コンサート」でのバッハ・マタイ受難

曲のアリアの演奏は、新聞紙上等で絶賛される。現在、高知大学非常勤講師。グルッペ・ベッヒライン会員。



## 佐々木まり子 アルト

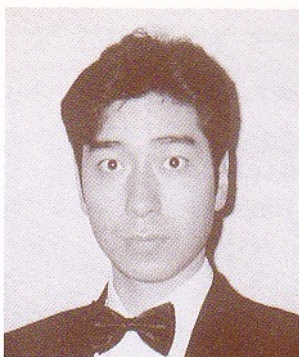
東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱専攻修了。毎日学生コンクール西日本一位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、小林道夫、森明彦の各氏に師事。

学部在学中より小林道夫氏のもとにおける東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブ演奏会において数多くのカンタータ、オラトリオのアルト・ソロを受け持つ。又、大学合唱団、一般合唱団と多数共演。モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」ヘンデル「メサイア」バッハ「ロ短調ミサ」「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」メンデルスゾーン「エリア」「パウロ」など大曲のアルト及び第2ソプラノ・ソロを務める傍ら、尚美音楽学院（現尚美音楽短大）講師として、後進の指導にあたる。

1980年にデトモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマル、ハンス・クールマン両教授に師事。ドイツ・リート、オラトリオ歌唱法並びにドイツ語舞台発音法の研鑽を積む。その間北ドイツを中心に、バッハをはじめ数多くの宗教音楽、歌曲演奏会に出演。特に、ヒルデスハイムにおけるバッハの「カンタータ第170番（アルト・ソロカンタータ）」ミュンスターにおけるC・P・E・バッハの「マニフィカート」は新聞紙上で絶賛される。

帰国後も、H・ヴィンシャーマンとバッハ「クリスマス・オラトリオ」で共演したのをはじめ、バッハ、ヘンデルのカンタータ、オラトリオ演奏会に多数出演。温かく豊かで深みのある歌唱によって、東京を中心に、札幌、弘前、盛岡、仙台、横浜、名古屋の各地で活躍している。1985年には、西ドイツに招かれ、オルデンブルク、アーヘンにおいてヘンデル「プロケス受難曲」バッハ「復活祭オラトリオ」のアルト・ソロを歌い好評を博す。1986年にも、日本教会音楽協会仙台・盛岡の西ドイツ演奏旅行にソリストとして帯同し、ヘンデル「メサイア」シュッツ「ドイツ・レクイエム」のアルト・ソロを見事に歌い上げ、新聞各紙でその高い音楽性を称賛される。1993年9月にはA・ギーベル女史とのメンデルスゾーン「パウロ」に出演、10月にはH・ヴィンシャーマン指揮によるドイツ・バッハゾリステンの「マタイ受難曲」のアルト・ソリストとして、盛岡、仙台、岡山、東京に帯同し、いずれも高い評価を得た。

現在、女声合唱団・グレイセスもりおか指揮者。東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、盛岡子供劇団CATSきゃあ各ヴォイス・トレーナー。グルッペ・ベッヒライン会員。



## 小原 浄二 バス

1964年岩手県花巻市生。1987年岩手大学教育学部音楽科卒業。1991年東京芸術大学音楽学部声楽科首席卒業。同時に松田賞受賞。1994年東京芸術大学大学院修士課程独唱科修了。声楽を森肇子、佐々木正利、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に、ピアノを佐々木幸子、柏淳子、高橋功宜の各氏に師事。ドイツリート、オラトリオを中心に研鑽を積み、東京芸大時代には小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに所属し、数多くのソロを歌う。その後、芸大「メサイア」「ヨハネ受難曲」公演をはじめ全国各地の演奏会にソリストとして出演。1991年にはウィーン楽友協会ホールにおいて、ブラームス「ドイツレクイエム」、また、1993年にはシュトゥットガルト、ケルン、ドレスデン、ワイマール等において、「ヘルダーリンの詩による歌曲」を歌い好評を博す。1992～1994年にはバッハコレギウムジャパンに所属しコーラスマスターを務める一方ソリストとしても活躍。1994～1995年ドイツ〔ハンプルク・デットモルト〕留学。ヘルムート・クレッチマール氏に師事。留学中も積極的に音楽活動を行い、特にレリゲン市におけるヴォルフガング・ツィルヒャー指揮、ロッシェニ「ミサ・ソレネッレ」や、ミュンヘン、ヘラクレスホールにおけるニュルンベルク交響楽団定期公演、ヨゼフ・ツィルヒ指揮、ハイドン「天地創造」のバスソロなどは、現地新聞紙上等において高い評価を受ける。現在、高知大学教育学部音楽科助教授。グルッペ・ベッヒライン会員。

## 東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」は、1970年に東京芸術大学の学内サークルとして創立されたバッハ・カンタータ・クラブのOB等を中心に、バッハの宗教曲等の演奏会のために編成された室内オーケストラである。レパートリーはバッハに留まらず、古典から現代まであらゆるジャンルの室内楽曲に及び、その演奏はいずれも世界的評価を得ている。メンバーは固定されておらず、母校芸大の教授陣はじめ、各大学の教官、主要オケの首席奏者、世界的独奏家、主要カルテットのメンバー等、都合300人余りに及ぶOB会員の中からその都度編成されている。

母体となっているバッハ・カンタータ・クラブは、声楽、器楽、作曲、楽理科の学生からなる芸大唯一の総合的音楽サークルであり、顧問に服部幸三、角倉一朗両教授、指揮・指導に創設時より一貫して小林道夫をお招きし、現在に至るまで毎年の定期公演を中心に活動が続けている。



## 川原 千真 コンサートマスター

東京芸大及び大学院卒。在学中に芸大オーケストラと共演。読売新人演奏会出演。バイオリンを故松本貞夫、野上早三博・絃子、海野義雄、田中千香士、ヴィオラ・ダ・ガンバを平尾雅子の各氏に師事。現在、弦楽四重奏を中心とした室内楽、オリジナル楽器によるバロック音楽の分野で活動を展開。これまでにマイケル・チャンス、ナンシー・アルジェンタ、ペーター・ノイマン、スティーヴ・ライヒと共演。NHK〈土曜リサイタル〉、〈FMリサイタル〉などに出演。今秋、エマ・カークビー、ヒロ・クロサキと共演予定。ALMレコードより「音楽三昧 1. 2」、「古典四重奏団」、エクセルフォンより「古典四重奏団 2」をリリース。古典四重奏団として、97年度村松賞を受賞。



## 劔持清之 オルガン

国立音楽大学卒業。ピアノを中村ウメ、佐々木靖子、小島満里、故ロマン・オルトナー、チェンバロ、通奏低音を西川清子、オルガンを小林みゆきの各氏に師事。91年モーツァルト没後200年記念演奏会でピアノ協奏曲を演奏（仙台）。94年仙台N T T主催チェンバロリサイタル。95年モーツァルトの室内楽によるリサイタル（盛岡）。岩城宏之指揮、ハイドン“天地創造”でのチェンバロ（盛岡、仙台）。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインのドイツ演奏旅行に帯同、ニュルンベルク交響楽団とのハイドン“天地創造”でチェンバロを務める等、近年、各種演奏会においてチェンバロ、オルガン、ピアノで活動の場を広げている。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン・オルガニスト。盛岡大学短期大学部助教授。

## 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

1977年、J・Sバッハのカンタータを研究・演奏する目的で発足。当時すでに、「東京芸大バッハ・カンタータクラブ」の創立者の1人として活躍し、バッハの声楽曲に深い造詣を示し、東京芸術大学大学院生だった佐々木正利氏を指揮者に迎え、以来、一貫して、バッハの作品を中心としたドイツバロック合唱曲を「言葉が生き、音楽が生きる演奏」を音楽信条として、音楽活動が続けている。



# プログラム・ノート



13. 4. 97

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

サブ・コンサートマスター 佐々木 幹 雄

## 第1部 Himmelfahrts-Oratorium (昇天祭オラトリオ) BWV11

### 【曲の成立に関して】

1735年5月19日、ライプツィヒにて初演された。この年、バッハは50歳であり、前年末から新年にかけて、かの『クリスマス・オラトリオBWV248』の6部作を初演している。オラトリオシリーズの最後となる作品。『クリスマス・オラトリオ』同様、多くの曲が他のカンタータからの転用、改作であることがわかっている。

この作品が「オラトリオ」と称されているのは、(1)自筆総譜のタイトルページにエマーヌエル・バッハの筆跡で「Oratorium/auf Himmelfahrt」と書かれていること、(2)「物語音楽」としての様式をもっていること、の2点に因る。歌詞の作者は不詳だが、ブーゲンハーゲンが諸福音書を調和させて編んだテキストに基づいてテノールの福音朗読者(Evangelist)が物語を進行させる。

### 【昇天祭の意味】

イエスの昇天。それは、キリスト教伝導活動のスタートでもある。祝福された弟子たちが、天に上ってゆくイエスを見て、非常な喜びをもってエルサレムに帰り、その喜びをもとに、イエスへの信仰を確かなものにしたからである。

したがって、「昇天」はキリスト教にとって非常に喜ばしいことであり、このオラトリオの全体にその雰囲気の流れている。そしてそれを強めるために、前半ではイエスとの別れを悲しむ気分をただよわせ、真の信仰の確立を引き立たせている。

では、実際にどのような音楽付けがされているのか、対訳をご覧になりながらお聴きいただきたい。

### 1. 合唱

トランペット3、ティンパニー、フルート2、オーボエ2、弦楽、コンティヌオと合唱という、多彩、かつ華やかな編成で昇天のドラマの幕が開く。祝祭的な気分の強いこの曲は、1732年6月5日のトーマス学校改装校舎の落成記念式典用カンタータ「喜ばしき日、待ち望まれし時(Froher Tag, verlangte Stunden) BWV Anh.18」の冒頭合唱の転用である。

### 2. レチタティーヴォ(テノール)

復活したイエスが弟子たちを祝しながら離れていくという、いわば場面設定であり、昇天物語のスタートでもある。

### 3. レチタティーヴォ(バス)

別れの場面での人々の気持、すなわち、イエスとの別れを悲しみ、イエスを慕う心情を語る。伴奏するフルートの音形は、したたる涙(Tränen)のようである。

### 4. アリア(アルト)

ヴァイオリンのユニゾンとアルト・ソロで奏される悲しみのニュアンスに富んだ二つの旋律が、休符で切りはなされながら一貫した歩幅で歩み続けるコンティヌオに

よって結び付けられている。「ああ、どうか留まって下さい」という切々たる訴えが、言葉を持たない楽器の旋律からも聴きとれるようである。

ちなみにこの曲は、結婚セレナータ「いざ、甘美に魅了する力よ(Auf! süß-entzückende Gewalt) BWV Anh.196/Anh.14」(1725年11月27日初演)の第3曲の転用であり、後にはミサ曲短調(BWV232)の「神の小羊(Agnus dei)」に再転用された曲である。

### 5. レチタティーヴォ(テノール)

短い、イエスの昇天を高らかに告げる。上昇する旋律が「昇天」を表現し、最高音には「天(Himmel)」という言葉が配されている。

### 6. コラール

「いまや、人のみでなく大気も水も、万物があなたの下にある」と歌う。コラールはルター派教会では会衆がともに歌って神を賛美するための歌でもあり、昇天による信仰の確信と喜びを会衆の心の中に喚起させる。

(J. リスト「汝生命の君、主イエス・キリスト

(Du Lebensfürst, Herr Jesu Christ)」(1641)

第4節]

#### 7a. レチタティーヴォ (テノール/バス)

ここから第2部となる。

使徒行伝のストーリーから採られている。「白い衣を着た2人の人」の言葉の部分から二重唱となり、物語がドラマ性をおび、音楽もドラマチックである。

#### 7b. レチタティーヴォ (アルト)

前出の「2人の人」の語ったイエスの「再臨」を切に求める、悩める魂の祈り。第3曲同様フルートが伴奏をすることで、心の中の語りであることを印象づける。

#### 7c. レチタティーヴォ (テノール)

弟子たちが、天に上げられたイエスを拝し、大いなる喜びをもって (mit großer Freude) エルサレムに帰ったことが告げられる。

#### 8. アリア (ソプラノ)

このようにして人々は喜びに満たされ、「再臨」への期待に胸が弾むような3拍子の明るいアリアとなって表現される。高い音域の楽器と声のみを使い低声部がないので、軽やかで天上的なイメージをもっている。

ちなみにこの曲も第4曲と同じセレナータから転用されたものである。

#### 9. コラール合唱

クリスマス・オラトリオの最後のコラール合唱を思わせる華やかさと力強さをもっている。昇天祭用コラールの定旋律をソプラノが歌い、他の声部は自由なポリフォニーで綾を織りあげている。イエスの再臨を心から願う会衆の心理と一体となって歌われる。

(G.W. ザーツァー「神は天に昇りたもう (Gott fährt auf gen Himmel)」(1671) 第7節)

## 第2部 ラテン語による小品集

### 【ラテン語とルター派教会】

プロテスタント教徒であったバッハがラテン語のミサ曲やマニフィカトを書いた。これは一見おかしな感じを私達に抱かせる。「ルターは宗教改革で人々に理解し難いラテン語を目の敵とした」という印象が強いけれど、実際にはそうではなく、ラテン語の聖歌をいくつもルターは礼拝の中に採用しているし、バッハ時代のルター派教会では、「Kyrie」と「Gloria」からなる『カンタータ風ミサ曲』と呼ばれるミサ曲が年間を通じ多くの日曜や祝日および特別な機会の礼拝に演奏されていたことも、今日知られている（どこが『カンタータ風』なのかというと、(1)歌詞が数行ずつに区切られ、(2)カンタータのように独立した楽章として曲付けされているという点である）。

バッハの『カンタータ風ミサ曲』で有名なものはBWV233~236の4曲であり1738-1739頃に作曲されたが、そのほとんどの楽章が旧作からのパロディである。一方、バッハが他の作曲家のミサ曲の作品をたくさん所有していたことも知られている。したがって、バッハはもっぱら自分の旧作や他人の作品を演奏したり改作したりして、ラテン語による教会音楽（これは継続使用が可能でもある）を作曲するというつとめを果たしていたと考えられる。

後の作品のもとになった小品、バッハの手による編曲や改作を施された他者の作品、大きめの曲への挿入曲など、有名でなく目立たないけれども素晴らしい幾つかの作品について、以下、ご紹介したい。

### 【各曲の成立・構成】

#### ☆ "Kyrie-Christe, du Lamm Gottes" F-Dur BWV233a

後にBWV233, F-Durのカンタータ風ミサ曲の「Kyrie」となる曲で、ヴァイマル時代に書かれたものと考えられている。

伸びやかで落ち着いたテーマをもった4声部のフーガが透明感をもって鳴り響く。その上でソプラノのコラール旋律（改作後のBWV233ではトランペットとオーボエ各2本のユニゾンのみで歌詞はつかない）が「救い主よ、神の子羊よ、世の罪を担われた方、我らを哀れんで

ください。あなたの平安をわたしたちにお与え下さい。」とドイツ語で訴えかける。

短い曲であり3部分（第1 Kyrie、Christe、第2 Kyrie）での調も変わらないのに音楽が常に新鮮で新たに湧き出てくるのは、様々なテーマの提示のしかたと随所に聞かれるシンコーペーションのリズムによるものである。

#### ☆ "Kyrie c-moll" aus der Missa BWV Anh. 26

情感あふれるアルトのテーマで始まる「第1 Kyrie」、

女声2部とコンティヌオのみで演奏される、短いが洗練された「Christe」、しっとりとした「第2 Kyrie」という3部分から構成されている。

実はこの曲、同時代のイタリア人作曲家フランチェスコ・ドゥランテ（1684-1755）のハ短調ミサ曲をベースにしてつくられたKyrieである。1727-32年頃ライプツィヒにてバッハの手により成立した。バッハの手元には原作の「第1 Kyrie」の楽譜しかなく、礼拝での演奏を可能にするために「Christe (g-moll, BWV242)」を新たに作曲し、「第2 Kyrie」の部分を同じドゥランテのミサ曲の「Gloria」のパロディによって付け加えたことである。

#### ☆ “Virga Jesse floruit” (ソプラノ/バス二重唱)

「マグニフィカトBWV243a」の第9曲と第10曲の間に挿入される曲。クリスマス用に挿入されたと考えられている曲で、かいば桶のかたわらでの子守歌である。イエス誕生の喜びに満ちたソプラノとバスによる軽快なカノン風の旋律で、12/8の3連符をコンティヌオがきざむ。

#### ☆ “Gloria in excelsis Deo”

「マグニフィカトBWV243a」の第7曲と第8曲の間に挿入される曲。同じクリスマス用で、歌詞はルカ伝第2章14節による。野宿をする羊飼いの前に現れたみ使いとおびただしい天の軍勢が神を賛美して言った言葉である。5声部からなり、第1ヴァイオリンがオブリガート旋律を演奏する。

#### ☆ “Sanctus” D-Dur, BWV238

1723年12月（クリスマス）、ライプツィヒにて初演され、1736/37年頃再演された。

ホルネット（ツィンク）、第2ヴァイオリン、ヴィオラがソプラノ以下の声部を重複して演奏し、第1ヴァイオリンがオブリガート（時にテーマ）を演奏する。バスから第1ヴァイオリンまでの5つの声部の、わくわくする、しかも端正なフーガの導入部（4/4）に続いて各声部の掛け合いがあり、後半には12/8の流麗なフーガが展開される。天と地に満ちる栄光を、喜びをもって歌い上げる。

## 第3部 Magnificat BWV243

### 【「マグニフィカト」とは】

「マグニフィカト」の歌詞はルカ伝第1章46～56節に現れる、受胎告知を受けたマリアがその幸せを感じて神をたたえ「私の魂は主をあがめ、私の霊は救い主である神を喜びたたえます。」と歌ったとされる、その歌から採られている。

バッハが教会で音楽を創っていた当時、毎日曜日の晩課の礼拝の際に、ドイツ語によるマグニフィカトが単旋律で歌われていた。しかし、クリスマス、復活祭、聖霊降臨祭の三大祭にはラテン語の多声部からなるマグニフィカトが盛大に演奏されるのが常であった。

この「マグニフィカト (BWV243)」は、1723年12月25日にライプツィヒで初演されたBWV243a (Es-Dur) の改訂稿であり、10年後の1733年7月2日（マリアのエリザベト訪問の祝日）に初演された。単に調を変えたばかりでなく、楽器の編成や音楽自体にもかなりの改訂を加えている。また、（第2部に記したような）クリスマス用の4つの挿入曲が削除されている。このように改訂することにより、クリスマスにとらわれない汎用な「マグニフィカト」、トランペットが高らかに鳴り響く祝祭的な「マグニフィカト」をバッハは手に入れることになる。

全体は音楽的に3部から成っており、その全体を第1曲と第12曲ではさみこんでいる。冒頭（第1曲）と締めくくり（第12曲）の曲、および、第2部の締めくくりにあたる第7曲は、金管（トランペット3本）、木管（フルート2本、オーボエ2本）、弦楽器とコンティヌオ（通奏低音）によるフル・オーケストラで伴奏される5声部の合唱である。

### 【各曲の特徴】

冒頭の輝かしい第1曲（合唱）は、マリアの喜びを存分に歌い上げる。3拍子の沸き立つようなリズム感に溢れ、駆け抜けるような旋律と踊るようなコンティヌオが曲全体の雰囲気をつくる。

第2曲（ソプラノⅡ独唱）は、引き続きマリアの喜びを、今度は伸びやかなソプラノと柔らかい弦楽器で表現する。神によりイエスを身ごもったうれしさに満ちている。

第3曲（ソプラノⅠ独唱）は、神の恵みの深さ、慈悲深さを想い、内省するマリアの心持ちをソプラノが切々と歌い、オーボエ・ダモーレの旋律が心にしみ入る。マリアを「悩める平凡な女」とするルターのマリア観が反映していると考えられる。後半は、顔を上げ胸を張り、自分に与えられた栄誉と至福を表現する。

第4曲（合唱）は、第3曲に続いて、マリアの栄誉と至福を全ての世代の人々がとこしえに賛美する様子を、絶え間なく模倣される音形（omnes, omnes generationes）の積み重ねによって表現し、第1部の締めくくりとする。ここでバッハは、人々の賛美を表現するために合唱を用いている。

第5曲（バス独唱）から、第2部に入る。一転して明るい調になり、バスが堂々と、かつ、喜びに満ちて全能の神の偉大さ、その名の神聖さを歌う。

第6曲（アルト・テノール二重唱）は12/8で主の憐れみと恐れを表現する。アルトとテノールの二重唱はそのほとんどが平行に動いており、掛け合いが少ない分、優しさに溢れている。

第7曲（合唱）は第2部の締めくくりとなる。主がその力をふるっておごり高ぶる者を追い散らす様子が、音画的に表現される。そして最後に、勝ち誇る主の力を輝かしく表現して終わる。

第8曲（テノール独唱）から、第3部に入る。主の力強さと厳しさをテノールとユニゾンのヴァイオリンが表現する。「引き下ろす（deposuit）」には下降音形が、「高める（exaltavit）」には上降音形が使われている。

第9曲（アルト独唱）は2本のフルートとピッチカー

トを伴ったコンティヌオと優しさいっばいのアルトのソロで演奏される。飢えたるものを良き物で満たす主の優しさと、富める者の空しさ、空虚さがいたるところで対比されて表現される。

第10曲（女声三重唱）はチェロのみのコンティヌオ、定旋律のオーボエ、そして高い音域のみの清楚な女声という編成である。流れるような穏やかな旋律と繊細な響きをもって主への感謝を切々と歌う。オーボエが奏でるコラル旋律の原曲はドイツ語による「マリアの賛歌（Der Lobgesang der Maria）」と呼ばれるもので、ドイツ語による「マグニフィカート」そのものである。すなわち、“Meine Seele erhebt den Herren, und mein Geist freuet sich Gottes, meines Heilandes, ……”といった具合であり、ルター派教会に通うドイツ人なら慣れ親しんでいるコラルなので旋律を耳にただけでその意味するところを瞬時に理解するであろう祈りの旋律でもある。

第11曲（合唱）は端正なモテット風の合唱曲である。順列フーガの書法を用い、控えめな展開を見せる。ポリフォニックな前半からホモフォニックになって、曲の山場をむかえる。とこしえに変わらぬ主との約束を歌う。

第12曲（合唱）は「主の祈り（ドクソロジー、頌詠）」と呼ばれる、三位一体をたたえる歌詞である。堂々として広がってゆく「栄光（Gloria）」が3回繰り返される。そして、フル・オーケストラで第1曲のテーマに帰り、永遠に続く主の栄光を輝かしく歌い上げて、全曲の幕をとじる。

以上見てきたように、この曲は、短いテキストに込められた意味を十分にくみ上げてそれに応じて音楽付けを工夫したバッハの傑作の一つである。

多くのカンタータのテキスト（歌詞）はドイツ語であり、非常に神学的かつ詩的なものが多い。したがって時代の趣味にもとらわれることとなり、19世紀前半のバッハ復興運動においてはあまり注目されなかった。しかし、ラテン語をテキストとするこの「マグニフィカート」は1811年にはすでに出版されていた（ちなみに「口短調ミサ曲」の出版は1833年）。それは、ラテン語による礼拝音楽の歌詞は時代を超越してどの時代でも通用し、実用に供するからであった。

バッハの死後忘れられた彼の作品の中でも、早い時期に復興され受容されてきたこの「マグニフィカート」。スケールの大きさでは「口短調ミサ曲」や「マタイ受難曲」には及ばないものの、歌詞と音楽の統一性、音楽の多彩さ、凝縮性においては勝るとも劣らない名作である。

# 歌 詞 対 訳

## 第1部 Himmelfahrts-Oratorium, BWV11 「昇天祭オラトリオ」

### 1. Coro

Lobet Gott in seinen Reichen,  
Preiset ihn in seinen Ehren,  
Rühmet ihn in seiner Pracht!

Sucht sein Lob recht zu vergleichen,  
Wenn ihr mit gesamten Chören  
Ihm ein Lied zu Ehren macht!

### 2. Recitativo

“Der Herr Jesu hub seine Hände auf  
und segnete seine Jünger, und es geschah,  
da er sie segnete, schied er von ihnen.”

### 3. Recitativo

Ach, Jesu, ist dein Abschied schon so nah?  
Ach, ist denn schon die Stunde da,  
Da wir dich von uns lassen sollen?  
Ach siehe, wie die heißen Tränen  
Von unsern blassen Wangen rollen,  
Wie wir uns nach dir sehnen,  
Wie uns fast aller Trost gebricht.  
Ach, weiche doch noch nicht!

### 4. Aria

Ach bleibe doch, mein liebstes Leben,  
Ach fliehe nicht so bald von mir!

Dein Abschied und dein frühes Scheiden  
Bringt mir das allergrößte Leiden,  
Ach ja, so bleibe doch noch hier,  
Sonst werd' ich ganz von Schmerz umgeben.

### 5. Recitativo

“Und ward aufgehoben zusehens und fuhr auf  
gen Himmel, eine Wolke nahm ihn weg vor  
ihren Augen, und er sitzt zur rechten Hand  
Gottes.”

### 6. Choral

Nun lieget alles unter dir,  
Dich selbst nur ausgenommen,  
Die Engel müssen für und für,  
Dir aufzuwarten kommen.  
Die Fürsten stehn auch auf der Bahn  
Und sind dir willig untertan;  
Luft, Wasser, Feuer, Erden  
Muß dir zu Dienste werden.

### 7 a. Recitativo

“Und da sie ihm nachsahen gen Himmel  
fahren, seine, da stunden bei ihnen zwei  
Männer in weißen Kleidern, welche auch  
sagten: ”

“Ihr Männer von Galiläa, was stehet ihr und  
sehst gen Himmel? Dieser Jesus, welcher von  
euch ist aufgenommen gen Himmel, wird  
kommen wie ihr ihn gesehen habt gen Himmel  
fahren.”

### 1. 合唱

神を諸々の国において讃えよ  
神のその諸々の御業において讃えよ  
その栄光のゆえに崇めよ。

正しき調べにてその賛美を歌わんと努めよ、  
汝ら群れに集いて声合わせ、  
神に誉れの歌を捧げる時。

### 2. レチタティーヴォ

「主イエスは手を挙げ、その弟子達を祝す。  
かくて祝すうちに、  
弟子らから離れたもう。」

### 3. レチタティーヴォ

おおイエスよ、汝去るは間近か?  
おお、既に時は迫り、  
汝を我らが許より送るべきか?  
おお、見たまえ、我らが熱き涙を  
我らが頬より流れ落ちたるを。  
我らかくも汝を慕いたるゆえ、  
いかなる慰めもむなしきなり。  
おお、願わくば汝去る事なかれ。

### 4. アリア

おお、留まりたまえ、我が最愛の命なる君よ、  
おお、かくも急きて我が許より去りたもうな。  
  
汝かくも急きて我より去りたもうなかれ、  
そは我が比類なき苦しみなり。  
おお、さにあればしばしの間留まりたまえ。  
さもなくば我は悲しみに暮れん。

### 5. レチタティーヴォ

「かくして見守るうちに挙げ奉られ、  
天へと昇り行かれたり。  
雲これを受けて彼らの目より覆い隠したり。  
イエスは神の右に座したもう。」

### 6. コラール

今やすべては汝の御下に在り。  
ただ汝のみ崇高なる御座に座せり。  
御使いらは絶えず行き来し、  
汝に使えたもう。  
地上の王侯も立ちて、  
汝の御前に真の忠誠を誓いたり。  
大気も水も火も大地も、  
汝に関わらざるもの無し。

### 7 a. レチタティーヴォ

「その昇天し後をおいて、  
彼ら天空に目を向けたるに、  
見たまえ、彼らが傍らに白き衣まといたる  
二人立ちて、かく告げし。」  
「ガラリヤの民よ、  
何ゆえに天空を仰ぎて立ち尽くすか?  
汝らより離れて天に挙げられし我は  
また再び行きたもう、汝らが我の  
昇天を見守りし如く。」

### 7 b. Recitativo

Ach ja! so komme bald zurück:  
Tilg einst mein trauriges Gebärden,  
Sonst wird mir jeder Augenblick  
Verhaßt und Jahren ähnlich werden.

### 7 c. Recitativo

“Sie aber beteten ihn an, wandten um gen  
Jerusalem von dem Berge, der da heißet der  
Ölberg, welcher ist nahe bei Jerusalem und  
liegt einen Sabbather-Weg davon, und sie  
kehrten wieder gen Jerusalem mit großer  
Freude.”

### 8. Aria

Jesu, deine Gnadenblikke  
Kann ich doch beständig sehn.

Deine Liebe bleibt zurücke,  
Daß ich ihu mich hier in der Zeit  
An der künftigen Herrlichkeit  
Schon voraus im Geist erquicke,  
Wenn wir einst dort vor dir stehn.

### 9. Choral

Wann soll es doch geschehen,  
Wann kömmt die liebe Zeit,  
Daß ich ihn werde sehen  
In seiner Herrlichkeit?  
Du Tag, wann wirst du sein,  
Daß wir den Heiland grüßen,  
Daß wir den Heiland küssen?  
Komm stelle dich doch ein!

## 第2部

### Kyrie-Christe, du Lamm Gottes F-Dur

Kyrie eleison.  
Christe eleison.  
Kyrie eleison.

Christe, du Lamm Gottes,  
der du trägst die Sünd der Welt,  
erbarm dich unser.  
gib uns deinen Freiden.  
Amen.

### Kyrie c-moll

Kyrie eleison.  
Christe eleison.  
Kyrie eleison.

### Virga Jesse floruit

Virga Jesse floruit,  
Emanuel noster apparuit,  
induit carmen hominis,  
fit puer delectabilis.  
Alleluja.

### Gloria in excelsis Deo

Gloria in excelsis Deo,  
Et in terra pax hominibus,  
bona voluntas.

### 7 b. レチタティーヴォ

「おお、しかり、とく帰りたまえ、  
そして我が悲しみを打ち払いたまえ、  
さもなくば我には世の刹那すら恐ろしく、  
永劫に等しく耐え難きなり。

### 7 c. レチタティーヴォ

「彼らは天に昇りしイエスを拝み、  
エルサレムに帰る。彼らが降りし丘は  
オリーブ山、エルサレムに近く、  
安息日行程の道程なり。  
かくして、彼らは再び至福の喜びをもちて  
エルサレムに帰りぬ。

### 8. アリア

イエスよ、汝が恵みの瞳こそ  
我は永遠に仰ぎ見奉る。

汝が愛は残されてあれば、  
我はこの時代の世界にて  
来たるべき栄光の前に  
霊にて既に与かる。  
かくて定めしに日に我らは恐れず御前に立つ。

### 9. コラール

しかしいつなるか、  
いつ愛しきときは来たるか、  
我、彼が御姿を  
威光の中に見たるか。  
汝、待たれたる日よ、いつ来たりて、  
我らが元へ救世主を迎え、  
接吻をもって彼を抱きたるか。  
来たるべし、いざ現れよ。

### 「キリストよ、汝神の子羊」

主よ、あわれみたまえ。  
キリストよ、あわれみたまえ。  
主よ、あわれみたまえ。

キリストよ、汝神の子羊  
汝は世の罪を担いし。  
我らをあわれみたまえ。  
我らに平和を与えたまえ。  
アーメン。

### 「キリエ」

主よ、あわれみたまえ。  
キリストよ、あわれみたまえ。  
主よ、あわれみたまえ。

### 「エサイの枝に花は咲き」

エサイの枝に花は咲き、  
我らがインマヌエルは誕生す  
人の御身体を受け、  
至高の御子となりぬ。  
アレルヤ。

### 「天のいと高きところに神の栄光あれ」

天のいと高きところに神の栄光あれ、  
地上の人々には平安と、  
善意あれ。

## Sanctus D-Dur

Sanctus, Sanctus, Sanctus,  
Dominus Deus Zebaoth,  
pleni sunt coeli et terra gloria ejus.

## 「サンクトゥス」

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。  
万軍の神なる主。  
主の栄光は天地に満つ。

## 第3部 Magnificat BWV243 「マグニフィカト」

### 1. Chor

Magnificat anima mea Dominum;

### 1. 合唱

わがこころは主をあがめ、

### 2. Aria

Et exultavit spiritus meus in Deo salutari meo.

### 2. アリア

わが霊、わが救い主なる神を喜び讃う。

### 3. Aria

Quia respexit humilitatem ancillae suae;  
Ecce enim ex hoc beatam me dicent

### 3. アリア

その婢女<sup>はしため</sup>の卑しきをも顧みたまえばなり。  
見よ、いまよりのちわれを幸いなりと称えん、

### 4. Chor

Omnes generationes.

### 4. 合唱

万世のひとつとは。

### 5. Aria

Quia fecit mihi magna, qui potens est:  
Et sanctum nomen ejus.

### 5. アリア

われに大いなることをなしたまえる者、そは力ある者なればなり。しかしてその御名は聖なり。

### 6. Duett

Et misericordia a progenie in progenies  
Timentibus eum.

### 6. 二重唱アリア

その憐れみは千代万代<sup>ちよよろづ</sup>かぎりなく  
主を恐るる者に臨むなり。

### 7. Chor

Fecit potentiam in brachio suo;  
Dispersit superbos,  
Mente cordis sui.

### 7. 合唱

主は御腕<sup>みから</sup>にて権能をふるい、  
高ぶれる者を追い散らしたもう、  
おのが心の思いの高ぶれる者をば。

### 8. Aria

Deposuit potentes de sede.  
Et exaltavit humiles;

### 8. アリア

権力ある者を位より引き下ろし、  
卑しき者を高うし、

### 9. Aria

Esurientes implevit bonis,  
Et divites dimisit inanes.

### 9. アリア

飢えたる者らを良きものにて飽かせ、  
富める者らを空しく去らせたもう。

### 10. Terzett

Suscepit Israel puerum suum,  
Recordatus misericordiae suae.

### 10. 三重唱アリア

主の下僕イスラエルを助けたまえり、  
その憐れみを忘れたまわず。

### 11. Chor

Sicut locutus est ad patres nostros,  
Abraham et semini eius in saecula.

### 11. 合唱

われらの先祖<sup>みおや</sup>たちに告げたまひしごとく、アブラハムと  
その末裔<sup>すえ</sup>とに対する憐れみをばとこしえに憶えたまえり。

### 12. Chor

Gloria Patri,  
Gloria Filio,  
Gloria et Spiritui sancto !  
Sicut erat in principio, et nunc,  
Et semper, et in saecula saeculorum.  
Amen.

### 12. 合唱

栄光、み父にあれ、  
栄光、み子にあれ、  
栄光 聖霊にもあれ！  
始めにありしごとく、今もまた、  
しかして世々の限りまで永遠に。  
アーメン

## 合唱団・出演者

### ソプラノⅠ

|        |       |       |       |       |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| 浅沼寛子   | 阿部靖子  | 岩井花文枝 | 小野寺貴子 | 菊池福子  |
| 久保木万喜子 | 斎藤理子  | 佐藤千砂  | 澤田東子  | 清水真理子 |
| 田口れい子  | 丹野亜希子 | 丹野貞子  | 野口淑   | 柳田松子  |
| 矢幅嘉子   | 吉田澄江  | 吉野玲子  |       |       |

### ソプラノⅡ

|       |      |      |       |      |
|-------|------|------|-------|------|
| 伊藤香織  | 菊池節子 | 熊谷充代 | 斉藤純子  | 佐藤温美 |
| 佐藤智恵子 | 菅村雅子 | 高橋聡子 | 高橋菜穂子 | 高橋玲子 |
| 福士静江  | 福田温子 | 藤崎美苗 |       |      |

### アルト

|       |       |      |        |       |
|-------|-------|------|--------|-------|
| 伊藤由美  | 大芦幸子  | 小川暁美 | 小野寺洋子  | 加藤織理絵 |
| 金子千鶴  | 兼田紀美子 | 桐原絹子 | 佐々木美智子 | 佐藤恵   |
| 須川加奈子 | 鈴木奈緒子 | 鈴木英美 | 立花美香子  | 丹野まり  |
| 千田加代子 | 中野和子  | 福田祐子 | 茂木容子   | 吉田まき子 |

### テノール

|      |      |       |      |      |
|------|------|-------|------|------|
| 小山内薫 | 斎藤健  | 佐々木幹雄 | 菅原伸作 | 高橋真哉 |
| 田代亮  | 寺沢敬行 | 中野寛司  | 目黒賢也 | 吉村哲  |
| 増田崇  |      |       |      |      |

### バス

|      |       |      |      |      |
|------|-------|------|------|------|
| 赤塚貴史 | 東勝    | 阿部学  | 小原一穂 | 小原竜太 |
| 川村有紀 | 佐々木義幸 | 佐藤和久 | 下田潤  | 武田宏之 |
| 田沢隆  | 芳賀郁夫  | 戸来百樹 | 横山泉  | 渡辺信之 |

## 盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

|                |                                               |          |
|----------------|-----------------------------------------------|----------|
| 1977年2月27日     | 「カンタータを歌う会」として発足                              |          |
| 6月28日          | 「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称                        |          |
| 1978年2月26日     | 「バッハコンツェルト」カンタータ第45番、第147番、芸大と共演              | 指揮 小林道夫  |
| 1979年10月6日     | 「BACH ABEND」カンタータ第158、131番                    | 指揮 小林道夫  |
| 1980年2月27日     | 「バッハの夕べ」カンタータ第80番、芸大と共演                       | 指揮 小林道夫  |
| 1980年12月22日    | チャリティーコンサート初年：市内バロック音楽愛好家グループ                 |          |
| 1981年7月4日      | 「BACH ABEND」カンタータ第196、182番                    | 指揮 小林道夫  |
| 1982年11月22日    | 「バッハの夕べ」カンタータ第158・4番                          | 指揮 佐々木正利 |
| 1985年3月16日・17日 | J・Sバッハ生誕300年記念演奏会「ヨハネ受難曲」<br>(仙台宗教音楽合唱団と合同演奏) | 指揮 佐々木正利 |
| 1985年11月3日     | 仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」                            | 指揮 佐々木正利 |

|                   |                                                                      |                   |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------|-------------------|
| 1985年11月29日       | G・Fヘンデル生誕300年記念演奏会「メサイア」                                             | 指揮 佐々木正利          |
| 1986年4月11日        | 「宗教音楽の夕べ」シュッツ「ドイツ・レクイエム」<br>バッハ「モテット1番」他                             | 指揮 佐々木正利          |
| 1986年4月～5月        | 第1回ドイツ演奏旅行「メサイア」「ドイツ・レクイエム」                                          | 指揮 佐々木正利          |
| 1986年7月11日        | 「東京ソリスト演奏会」共演、ベルゴレーシ「スターバト・マーテル」                                     | 指揮 赤松 安           |
| 1987年3月28日        | 創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」<br>カンタータ第34番、第70番、第102番他                       | 指揮 佐々木正利          |
| 1987年11月27日       | ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「バロック音楽の夕べ」(主催)                                     |                   |
| 1988年3月12・13日     | 仙台宗教音楽合唱団(創立20周年)との合同演奏会「ミサ曲口短調」                                     | 指揮 佐々木正利          |
| 1988年9月17日        | 「今仲幸雄バリトンリサイタル」(主催)                                                  |                   |
| 1988年11月17日       | 「ミヒャエル・ショッパバリトンリサイタル」(主催)                                            |                   |
| 1989年4月24日        | 「二重合唱の夕べ」バッハ「モテット第2番、第5番」他                                           | 指揮 佐々木正利          |
| 1990年3月10・11日     | 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団合同演奏会<br>バッハ「クリスマス・オラトリオ、第4部～第6部」「ミサ曲へ長調」 | 指揮 佐々木正利          |
| 1990年10月1日        | 「アグネス・ギベール 佐々木正利 ジョイントリサイタル」(主催)                                     |                   |
| 1990年12月～1991年1月  | 第2回ドイツ演奏旅行「クリスマス・オラトリオ」他                                             | 指揮 佐々木正利          |
| 1991年3月10日        | ドイツ演奏旅行帰国演奏会「クリスマス・オラトリオ」他                                           | 指揮 佐々木正利          |
| 1991年10月14・18日    | 「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」<br>ドイツ・バッハ・ソリストと共演                            | 指揮 ヘルムート・ヴィンシャーマン |
| 1992年3月21日        | 「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」カンタータ第93番他                                    | 指揮 佐々木正利          |
| 1993年10月20・24・29日 | 「マタイ受難曲」ドイツ・バッハ・ソリストと共演<br>(盛岡・仙台・岡山・東京)                             | 指揮 ヘルムート・ヴィンシャーマン |
| 1994年7月25日        | 「カンタータ第147番」仙台バッハアカデミーにおいて<br>仙台フィル・バッハアンサンブルと共演                     | 指揮 佐々木正利          |
| 1994年12月18日       | 弘前市民クリスマス：ヘンデル「メサイア」演奏会に出演                                           | 指揮 佐々木正利          |
| 1995年4月末～5月       | 第3回ドイツ演奏旅行「天地創造」他                                                    | 指揮 ヨセフ・ツィルヒ、佐々木正利 |
| 1995年8月26日        | 一関・東日本合唱祭参加「モテット第6番」他                                                | 指揮 佐々木正利          |
| 1995年9月26日        | 剣持清之・トリオフィオリレ「モーツァルト室内楽の夕べ」(主催)                                      |                   |
| 1995年10月8日        | 青山町教会チャペルコンサート「天地創造」抜粋他                                              | 指揮 小原 一穂          |
| 1995年11月22・23日    | 「天地創造」オーケストラ・アンサンブル金沢と共演(盛岡、仙台)                                      | 指揮 岩城 宏之          |
| 1996年3月15日        | 「バッハの夕べ」演奏会「カンタータ第21番」他                                              | 指揮 佐々木正利          |

## 団 員 募 集

合唱団では団員を募集しています。

年齢、経験を問いません。合唱の好きな方ならどなたでも大歓迎。

練習日：毎週火曜日 午後6時30分～9時

場 所：盛岡市志家町カトリック志家教会

お問い合わせ：019-623-7958 下田 潤

